

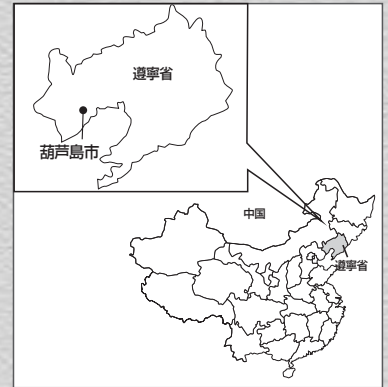
青少年交流を推し進める 古くて新しいまち



中国

葫芦島市

北京事務所所長補佐 小野田 貴哉（宮崎市派遣）



古くて新しいまち

二〇〇三年一月一日九時〇〇分、中国北西部甘肅省、酒泉衛星発射センターから、中国初の有人宇宙船「神舟五号」が打ち上げられました。「神舟五号」は、地球を一周した後一六日六時三三分に内モンゴルに帰還しました。中国が、世界で三番目、アジアでは初めての有人飛行を成功させた国となった瞬間です。

そのときの乗組員は、楊利偉中佐。彼は、このビッグニュースの後、一躍時の人となり、テレビや雑誌に引っ張りだことなっていますが、彼が中国東北地方、渤海湾に面したまち、遼寧省葫芦島市出身であることは、あまり知られていません。



↑楊氏をたたえる飛天広場

葫芦島市は、中国の人にも特に有名というわけではなく、総人口も二七三万人と、中国の中では、大きなまちとはいえません。ただ、楊利偉中佐がそこで生まれるには、それなりの理由がありました。葫芦島市には、高校に併設された空軍の早期訓練基地があり、この八年間に一四九人の卒業生を中国国内の有名な飛行学校に送り出す

など、まさに中国東北地方でも有数のパイロット養成基地であつたからです。また葫芦島市は、年間生産量五〇〇万tを誇る中国最大の海上油田である「361油田」、国内でも有数の大型船舶工場である「渤海造船工場」を抱える工業都市としての一面も持っています。石油のほかにも、石炭、鉛、亜鉛、金、石灰石などの鉱山資源や、建築用の砂、粘土、岩なども産出しています。

そんな工業色の強い葫芦島市も、一方では、明代から続くまち並みを残す「興城古城」や、万里の長城の中でも唯一河をまたぐ水上長城として有名な「九門口の長城」などの旧跡を抱える歴史文化都市でもあります。また、夏は美しく広がる砂浜を目当てに、多くの海水浴客が訪れ、冬には、この海岸線に向かって滑り降りるスキー場に、遠くは北京からも観光客が訪れます。ちなみに、まちの名前の葫芦島



↑美しい海岸



↑興城

市の「葫芦」とは中国語で「ひょうたん」の意味です。直訳すると、葫芦島は「ひょうたん島」。どうですか？日本人にとっては、ちよつと親しみがわきませんか？

日本とのかかわり

そんな葫芦島市は、実は、日本人とは深いつながりを持っています。それは、中国東北地方にいた日本人の多くが、戦後、引き揚げた港という一面です。戦前・戦後と、中国東北地方で多くの日本人が利用していた港といえば、中国東北地方で最大の日本人居留地であり、租借地でもあった大連が思い浮かぶと思います。しかし、終戦直前にソ連軍が大連を侵攻、支配してしばらくしてから、日本人は大連港から引き揚げることができなくなりました。また、当時の中国東北には、中国共産党軍、中国国民党軍、ソ連軍、地元の賊たちが混在し、状況は極めて不安定で、日本人の居留民たちは大変危険な状態にありました。そのようなか中で、アメリカ軍の仲立ちで、邦人引揚げが行われることになり、終戦当時、アメリカ軍とも近い国民党の支配地域であり、しかも、水深一



↑引揚げ港の現在の様子

○mほどの海岸が続く天然の良港であった葫芦島市が、中国東北地方からの日本人引揚げ者を送り出す港として選ばれました。

引揚げは、一九四六年五月から、国民党軍と共産党軍との戦闘が激しくなる一九四八年八月までの間行われ、引き揚げた日本人の総数は、約一〇五万人。遠くは二〇〇km以上離れた旧ソ連国境付近から、命を賭して逃げた旧ソ連国境付近から、命を賭して逃げた人たちが、葫芦島市は、まさに夢の目的地となりました。たどりついた日本人は、先着順に国民党の検閲を受けて乗船し、日本に向かいました。しかし、一方で葫芦島の海岸に着いたものの、海を目の前にして何日も何週間も待ち続け、中には志半ばで死んでいった人もいるといわれています。無事に日本に帰ることができた人も、そうでなかった人も、葫芦島の港で待ち続ける間、葫芦島の人たちの優しさに触れたと聞いています。葫芦島市には、「龍湾公園」という公園があります。その一角に、「国際友誼園区」が設けられています。そこには、世界各地の市から友好植樹が行われたり、記念のモニュメントが設置されたりしているのですが、その中に、



↑佐々木宗春氏寄贈モニュメント

子どもの背丈ほどの大きさの石に、赤い字で、大きく「恩」と書かれたモニュメントがあります。裏に書かれた碑文によると、一九四六年、佐々木宗春氏がハルビンから引き揚げの際、葫芦島の港で二カ月間、船を待つていたときに、重病を患いました。そのとき、葫芦島の住民三人が食べ物を与えて、一生懸命に励ましてくれたそうです。その甲斐あって、病気は治り、無事に帰国を果たすことができたのですが、佐々木氏は、そのときの感謝の思いを忘れることができず、その思いを、何とかもう一度伝えたいと、八〇歳を過ぎて、二度にわたって、恩人を捜しにやってきました。しかし、結局見つかりませんでした。そのときの思いを形に表そうと、佐々木氏は、四本のイチヨウの木を植樹するとともに、「恩」の字の碑を建てたのでした。

あの当時、日本人にとっての「希望」となった港は、現在、葫芦島市郊外の軍管轄区にあります。したがって、現在も日本人が引き揚げた場所を訪問するには、許可が必要で、付近の住民も自由に出入りができなくなっています。去年、私は葫芦島市関係者とその場所を初めて訪れましたが、港から海を見、後ろの山を見ると、往時、日本人がひしめき、ごった返したであろう風景が目に見え、感動しました。しかし、今年の秋に訪問した際には、工事が行われており、山はほとんど切り崩されてなくなっていました。また、ふ頭に目をやると、以前もだ

いぶ荒れてはいましたが、土台が波にさらわれ、今にも朽ち果てんばかりの姿となつて悲しく海に伸びていました。ふ頭のそばに立てられた記念碑だけがかつてここから一〇五万人の日本人が引き揚げたことを物語っていました。碑文の末尾はこう締めくくられています。「五〇年余りが過ぎ去り、当時のひどい戦争が中日両国人民にもたらした被害は記憶になお残っています。前の時代のことを忘れず、後の時代の教訓にしましょう。

未来に向かつて、歴史を以つて名を記します。中日両国人民が代々仲良く、永遠に戦わないことを願います」と。



↑日本人引揚げ記念碑

宮崎市中学生訪問団との交流

葫芦島市長から宮崎市長あてに、青少年交流を行いたい旨の親書が届いたのが、二〇〇二年四月。その前年から、葫芦島市の観光局長らが宮崎市を訪れるなど、交流の実績があったこともあり、同年五月、葫芦島市訪問団七人が宮崎市を訪問。また、同年八月、宮崎市中学生中国友好交流訪問団（中学生二人、引率五人）が初めて

葫芦島市を訪問し、葫芦島市と宮崎市の交流は本格的に始まりました。以降、葫芦島市と宮崎市は毎年、中学生を相互訪問させ、二〇〇六年で五年目を迎えます。

そのとき、宮崎市の中学生を受け入れたのは、葫芦島市実験中学。葫芦島市の中学生を受け入れたのは、宮崎市立住吉中学校。その交流の実績から、二〇〇四年五月一七日、両校は友好校の締結をしました。中学生同士の交流はその後、さらに活発に進んでいます。

毎年、宮崎市は、市内の全中学校から公募を行い、訪問団を結成し、葫芦島市を訪問しています。二〇〇五年も宮崎市から五〇名の訪問団が葫芦島市を訪れました。宮崎市の中学生たちのほとんどは、中国に行くのはこの日初めて。また、葫芦島市の生徒たちも、外国人に接する機会はほとんどないため、お互いにこの交流の日を心待ちにしています。訪問後、彼らは、書道をしたり、太極拳などを葫芦島市の生徒に教えてもらったりしながら交流を楽しんでいました。彼らは、

短い滞在時間があつという間に感じられました。と口をそろえて答えています。中国の中学生も、交流の時のふれ合いが



↑習字を教え合う生徒たち

忘れられず、交流が終わった晩も、宿泊先に訪ねていくという光景も見られました。

交流後、生徒たちはお互いに、メールや手紙で連絡を取り合い、近い将来、お互いが会えることを約束し合っています。葫芦島市も宮崎市も、こうした青少年交流を今後も積極的に進めていく方針であるということです。



↑生徒の交流

おわりに

日中交流を取り巻く状況は、依然厳しいといえます。そうした中、こういった中学生たちの交流は、明るい未来の日中関係を築く礎となるでしょう。推古天皇の時代に始まる遣隋使は、当時の多くの若者を中国に送り交流の道を開きました。あれから一四〇〇年余りがたった現在、葫芦島市は青少年交流を積極的に進めています。両者は、時代や形は違いますが、未来を担う若者たちを交流の主役にしていることは同じです。今後の彼らの交流が、お互いの国の相互理解に役立つことを期待してやみません。